

## 大学環境調査，学生生活実態調査 からみた教育評価

松井 明子

### 1. 大学環境調査

「大学環境調査 — College and University Environment Scales —」とは、立教大学学生部が1972年から独自に本学学生を対象に行ってきた調査である。この調査は、学生の目を通して、大学の生活を様々な角度から捉えることを目的としており、当時調査などが一般的ではなかった時代に唯一学生生活を知るうえで大きな意義を有していた。その後、不定期ながら継続して実施され、1996年からは4年に一度の間隔で実施しており、2004年秋に第13回調査を行う予定である。

#### (1) 立教大学での導入の経緯

元立教大学学生相談所カウンセラー平木典子氏（現日本女子大学教授）は、1968年米国版学会誌で発表されたカリフォルニア大学ベイス教授考案によるCollege and University Environment Scales (CUES) に着目し、日本でもこのような調査を開発したいと考え、同年5月より学生部員によりCUES翻訳が開始された。平木カウンセラーと

学生部員による半年間の項目検討、分類と修正、日本版作成準備作業を経て、1969年11月ブリテスト用150項目の設問、採点版が完成し12月に教職員有志による予備テストが実施された。1970年2月第1回予備テストが1学年120名合計480名を対象に行われ、回答者は200名であった。同年11月第2回予備テスト実施（対象者480名回答者178名）され、社会学部池田ゼミと共同作業によりコンピュータ集計を開始した。さらに1971年文学部推薦入学者を対象に調査を実施、池田研究室での学習会を経て150項目を100項目に絞り込んだ。1972年文学部推薦入学者キャンプで調査、追跡調査の後、実質3年の準備期間を費やして同年12月に第1回調査が実施された。詳しくは「1991年度在学学生（含大学院）大学環境調査報告書」を参照されたい。

#### (2) 調査の概要と特色

本調査は、大学を構成している施設設備から仲間意識に至るまでの諸側面についての質問に「はい」「いいえ」で回答する形式になっている。1991年

までは、①実用性、②学究性、③共同性、④妥当性、⑤意識性の5つの側面から分析していたが、1996年から①カリキュラム、②授業・教師、③学生の勉学態度・姿勢、④正課外活動、⑤社会的関心・意識、⑥仲間意識・帰属意識、⑦サービス・機会の提供、⑧ルール・マナーの8つに組替えて経年変化をみることにしている。

調査項目については、経年変化をみるため継続性を重視しているが、1997年全カリ開始などの大学環境の変化に対応するため部分的修正を行い、2000年には112項目となっている。従って

1996年と2000年実施分を比較すれば全カリの「効果」が測れるはずである。

### (3) 本調査からみた正課に関わる項目の経年変化

まず「立教大学大学環境調査領域別経年変化報告書」(注1)から①カリキュラム ②授業・教師 ③学生の勉学態度・姿勢の経年変化を追ってみた。

#### ①カリキュラム (表1)

本学の授業改革は学生たちにも明確

表1 カリキュラムに関する項目の回答率の推移

「はい」の回答率

	81年度	91年度	96年度	2000年度
1 この大学は、より実用的、現実的教育をする傾向がある。	16.7%	26.9%	26.3%	42.3%
8 多くのカリキュラムでは、具体的で実際的なものよりも、抽象的なものに重きがおかれている。	67.6%	68.7%	70.8%	60.4%
9 この大学では、実用的コースが設けられている。	47.6%	43.6%	36.8%	44.4%
44 この大学は、純粋な学問や基礎研究の面ですぐれている。	56.1%	46.4%	31.6%	44.6%
49 この大学では、教育方法やカリキュラムの改善に取り組んでいる。(注1)	50.9%	54.9%	67.7%	74.0%
53 この大学では、入学すれば卒業は簡単である。	62.7%	48.1%	50.7%	52.9%
107 この大学は、総合的な視野でものごとを考えるよう教育している。(注※)	—	—	41.5%	56.3%
108 この大学の言語(英語)教育は、充実している。(注※)	—	—	22.6%	51.5%
109 この大学の言語(英語を除く他の言語)教育は、充実している。(注※)	—	—	26.4%	42.3%
110 この大学の体育実技(スポーツ実習)は、充実している。	—	—	42.4%	44.1%
111 この大学の情報関連科目の教育は、充実している。(注※)	—	—	42.0%	54.4%

(注1) 81年・91年：この大学では、教育方法の改善や設備の改良に取り組んでいる。

(注※) この5つの設問は、97年度から全カリが展開されるにあたり96年度から追加した。

に認識されており、カリキュラムについて学生の評価は大幅に上昇した。「49 この大学では、教育方法やカリキュラムの改善に取り組んでいる」1996年 67.7%⇒2000年 74.0%。「107 この大学は、総合的な視野でものごとを考えるよう教育している」1996年 41.5%⇒2000年 56.3%「108 この大学の言語（英語）教育は、充実している」この項目は、1996年からの新設項目であるが、全カリの英語教育の改革が行われた結果、22.6%から51.5%へと飛躍的に上昇している。

全体として高い評価が得られている英語教育であるが、学年別に比較する

と、1年次生で満足度が最も高く、学年が上がるにつれて低下している。英語教育を標榜している本学のあり方として卒業時に低下してしまうことをどのように考えるべきであろうか。この点は後述する私大連学生生活実態調査も同様の結果が出ている。

## ②授業・教師（表2）

この領域は、低落傾向にあったが1996年を境に全般的にやや上がってきている。「6 教師は、学生の能力を充分引き出している」は1996年 10.4%⇒2000年 18.8%と上がっていることが注目される。「58 時間通りに授業

表2 授業・教師に関する項目の回答率の推移

「はい」の回答率

	81年度	91年度	96年度	2000年度
6 教師は、学生の能力を充分引き出している。	10.3%	17.8%	10.4%	18.8%
7 多くの教師は、積極的に研究にたずさわっている。	69.7%	69.0%	60.0%	67.9%
11 学生の勉強意欲をかりたてるような教授方法を工夫し実行している教師は少ない。	73.0%	83.1%	86.5%	79.6%
15 学問の厳しさを教える教師は少ない。	70.0%	77.3%	79.4%	73.7%
19 ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である。	32.4%	30.3%	24.9%	27.9%
20 知的レベルの高い授業が多い。	51.2%	52.4%	34.2%	43.4%
45 ほとんどの教師は、学生の個人的な問題に関心がない。(注2)	72.7%	75.5%	79.6%	77.9%
47 この大学では、幅の広い考え方を持っている教師が多い。	52.4%	42.3%	37.9%	51.2%
58 時間どおりに授業をはじめの教師は少ない。	85.5%	75.1%	75.5%	59.3%
65 教師の中には、マスコミで話題の人物がたくさんいる。(注3)	47.9%	27.1%	23.9%	33.8%

(注2) 96年：ほとんどの教師は、学生の個人的な問題に興味ない。

(注3) 96年：教師の中には、話題の人物がたくさんいる。

を始める教師は少ない」は1981年85.5%から2000年59.3%と減少しており、授業開始時間からも裏付けられよう。

### ③学生の勉学態度・姿勢（表3）

この項目は、20年前と比較してみると全体的に真面目に取り組もうとしている傾向が見られる。「55 ほとんどの学生は、授業でノートをきちんととろうとする」1981年32.7%⇒2000年

表3 学生の勉学態度・姿勢に関する項目の回答率の推移

「はい」の回答率

	81年度	91年度	96年度	2000年度
12 一生懸命に勉強しなくても、たいていの科目は簡単にパスできる。	52.4%	45.7%	52.4%	52.1%
13 教科書だけを勉強しておけば、ほとんどの試験は間に合う。	49.1%	39.7%	44.9%	47.4%
14 学生の間では、真剣な知的レベルの高い討論がよく行われている。	16.1%	11.7%	11.0%	11.9%
16 誰でも、単位を取りやすい科目と、取りにくい科目を知っている。	86.7%	75.2%	79.1%	65.9%
18 教師の研究室をたずねて、議論したり質問したりする学生が多い。	16.1%	10.1%	8.3%	10.8%
21 学生は、勤勉であり、はっきりとした勉学目標をもっている。(注4)	10.6%	9.4%	8.8%	13.8%
52 学生は、個人的な問題を教師に相談することはない。	81.2%	82.5%	81.9%	79.6%
54 この大学では、大学院に進学する学生が少ない。	81.2%	86.1%	77.8%	75.3%
55 ほとんどの学生は、授業でノートをきちんととろうとする。	32.7%	28.6%	21.8%	43.1%
56 よい成績をとろうと努力する学生が多い。	65.8%	57.5%	52.3%	52.6%
57 授業の途中で出入りする学生は少ない。	16.7%	18.0%	16.2%	25.5%
63 学生は、よく遅刻したり、欠席したりする。	93.0%	91.8%	95.2%	88.3%
73 学生は、自分たちが計画、立案したことを最後まで責任もってやりとげられるよう教育されている。	35.8%	37.3%	34.0%	41.1%
82 学生は、就職のために大学に来ている。	41.5%	35.8%	38.8%	41.6%
91 多くの学生は、自分の専攻を決めるにあたって、はっきりした目標をもっている。	26.7%	24.6%	22.7%	28.1%
101 学生は、自分や社会への関心を呼び覚ましてくれる授業を期待している。	—	89.4%	87.5%	89.6%
106 この大学では、授業よりもアルバイトやクラブ・サークル活動を、優先させる学生が多い。	—	85.8%	87.2%	78.8%

(注4) 96年：学生は勤勉であり、確固たる勉学目標をもっている。

43.1%。「16 誰でも、単位を取りやすい科目と、取りにくい科目を知っている」1981年86.7%⇒2000年65.9%と減少している。遅刻や欠席また授業の途中退席などについては、相変わらず多数の学生がしていると見ているが、過去20年間で2000年度が最も良好な数字であった。おそらくこの傾向は続いているのではないかと推察され、2004年度に実施予定の調査結果を待ちたいところである。

以上のようにカリキュラム、授業・教師、学生の勉学態度は、一般的に1996年を境に上昇傾向にあるが、試験や成績に関係する項目については、数値に変動がほとんどないか、もしくは低下している。「12 一生懸命に勉強しなくても、たいていの科目は簡単にパスできる」1981年52.4%⇒2000年52.1%。「56 よい成績をとろうと努力する学生が多い」1981年65.8%⇒2000年52.6%。「19 ほとんどの科目では、持続的な勉強や予習が必要である」1981年32.4%⇒2000年27.9%。学生の勉学に対する姿勢は真面目になってきているが、単位修得については、それほど難しいものとは考えていないようである。

## 2. 学生生活実態調査

私大の中での本学はどのような特徴があるのか、「学生生活実態調査」(注2)を用いて私立大学連盟(私大連)

加盟校の平均値と本学の結果を比較することにより把握することができよう。

### (1) 調査の概要

この調査の目的は、4年に一度私大連学生委員会が加盟校122大学を対象に実施する「学生生活実態調査」と同じ質問項目を、同時期に本学学生に独自に実施し、その結果から本学の位置を確認することである。これまで11回実施されており、調査項目は、Ⅰ基本事項、Ⅱ大学等の選択理由、入学後の満足度、大学への期待・展望、Ⅲ経済、Ⅳライフ、Ⅴ正課教育、Ⅵ正課外活動、Ⅶ不安・悩み、Ⅷ進路等となっている。

### (2) 正課に関わる項目の私大連平均と立教大学の比較

「私立大学学生生活白書2003」(2003年7月、編集：学生委員会第一分科会監修、社団法人日本私立大学連盟)の中で、「正課教育に対する学生の満足度は総じて上がっていない。カリキュラム構成と授業の内容に関して、前回調査から改善の跡が見られない。」と述べられているように、私大連平均の結果は決してよいとはいえない。一方本学については、以下の項目などからカリキュラム改革の成果は明白であるといえよう。

大学生活でこれまでに〇〇の力がついたと  
実感できますか

そう思う+ややそう思う (NA 除く) 5段階評価

私大連平均 (私) 1998年⇒2002年

立教大学 (立) 1998年⇒2002年

- ・外国語 (私) 22.6%⇒23.3%  
(立) 27.9%⇒33.7%
- ・視野を広げて物事を幅広く考える  
(私) 72.3%⇒74.0%  
(立) 73.6%⇒79.6%
- ・専門的知識をもとに論理的に考える  
(私) 45.2%⇒49.7%  
(立) 44.5%⇒55.0%
- ・自分の考えをまとめて分かりやすく表現する  
(私) 38.9%⇒42.6%  
(立) 37.4%⇒42.2%

大学の〇〇に満足していますか

大変満足+満足 (NA 除く) 5段階評価

私大連平均 1998年⇒2002年

立教大学 1998年⇒2002年

- ・教授陣の満足度  
(私) 32.9%⇒37.2%  
(立) 33.9%⇒41.9%
- ・カリキュラム構成の満足度  
(私) 27.5%⇒28.0%  
(立) 31.5%⇒33.0%
- ・授業の内容の満足度  
(私) 28.5%⇒28.1%

(立) 28.7%⇒31.8%

・ゼミなど少人数教育の満足度

(私) 42.8%⇒46.1%

(立) 41.0%⇒50.3%

立教大学の学生たちは私大連加盟校の平均より上記の点において力がついたらと実感している。特に外国語の力においては連盟平均より10ポイント以上も高く、まさしく本学の全カリ語学教育の成果と見ることができよう。しかし、学年別に見た時に、本学としての課題も認められる。

大学生活でこれまでに外国語の本を読んだり、  
外国語で話をする力がついたと実感  
できますか

そう思う+ややそう思う (NA 除く) 2002年

(左より、1年/2年/3年/4年)

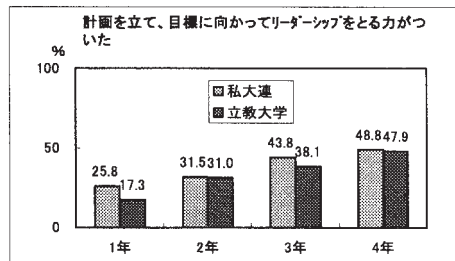
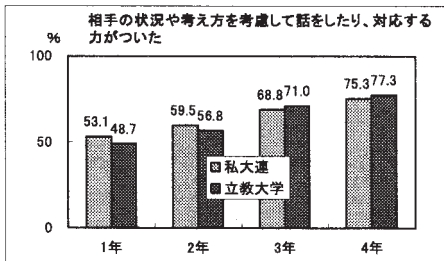
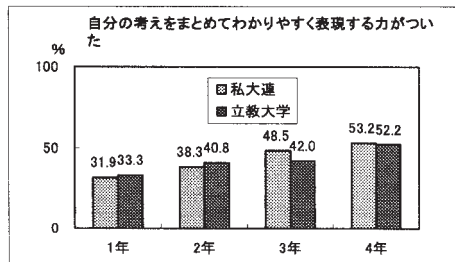
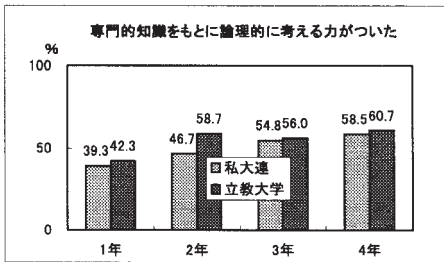
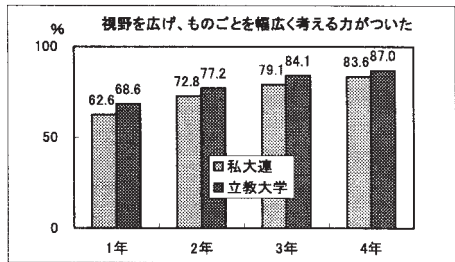
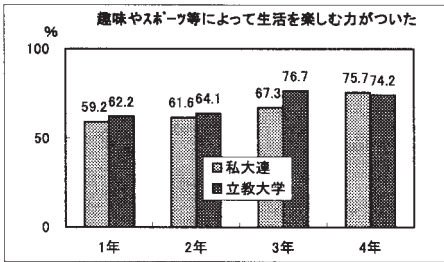
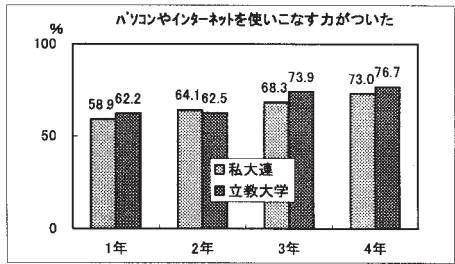
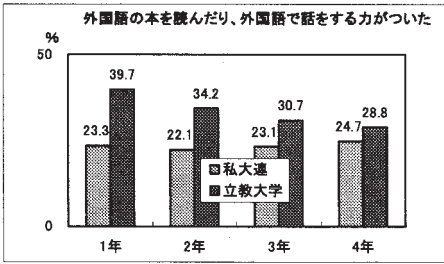
私大連平均

23.3% / 22.1% / 23.1% / 24.7%

立教大学

39.7% / 34.2% / 30.7% / 28.8%

「英語の立教」という言葉に代表されるように全カリ語学教育を受けた1年生は、私大連平均と比較して16.4ポイントも高く外国語の力がついたと回答している。しかし、私大連平均は1年生が23.3%から4年生は24.7%に微増するのに対して、本学は1年生が最も高く39.7%であり、4年生では28.8%に減少してしまう。4年生で私



第11回学生生活実態調査報告書（日本私立大学連盟）・第11回学生生活実態調査報告書（立教大学）より そう思う+ややそう思う（NA除く）

私大連	1年	1881名	2年	1875名	3年	1985名	4年	1449名
立教大学	1年	157名	2年	184名	3年	176名	4年	163名

大連平均よりも若干高いものの1年生から4年生への10.9ポイント低下は、本学の課題として受け止める必要があるりはしないだろうか。

### 3.まとめ

これまで学生部が実施してきた2種類の調査は、在学生の意識（主観）を問うものであるが、その結果は本学の教育効果を測る客観的な数値として認められるのであろうか。

学生部の調査は正課の教育効果を測ることが目的ではないが、学生生活の中で学生が正課をどのように捉えているかは重要な要素であり、学生支援に活用すべく学内に資料提供をしてきた。「2000年度版大学環境調査」については、全カリ教育開始前と後の数字の大きな変化から学生の反応を読み取ることができて、大学関係者にとって喜ばしいものであった。このように教育環境の変化など周辺事情を知るうえでは、少なからず有効であったと思われる。

但し、30年を経過した質問項目には検討すべきものがあることも事実である。例をあげれば、前述した「よい成績をとろうと努力する学生が多い」の質問に対して「はい」と答えた学生は1981年から2000年にかけて13.2ポイント低下しているが、実際により成績をとろうと努力している学生が13.2ポイント減少したことと同義ではないだろう。本学における「よい成績」の基準はどこにあるのか、また「よい成績」

と「努力」には果たして相関関係があるのか分からない。あるいは学生が捉える「努力」の意味が、変化していることも考えられるからである。

一方で学生の主観は大切である。もしも大学教育の効果を知るには学生の主観でよいとするなら、学年比較によって測る方法が考えられよう。私大連学生生活実態調査「大学生活でこれまでに〇〇の力がついたと実感できますか」(P.71 グラフ参照)。ほとんどの項目で学年が上がるに従い、力がついていると思う学生が増えている。私が、2002年私大連学生委員会第1分科会で第11回学生生活実態調査の作成に関わったときにも、この質問項目は、学生の成長発達および大学教育の評価に関わる重要な項目であるという議論があった。

私大連の質問には、必ずしも大学での教育だけで得られる力とは限らない項目も混在している。本学で新規の学生調査を開発し、〇〇の部分に当てはめる教育目標を設定する必要があるが、教育の効果を測るひとつの方法として検討に値するのではないだろうか。

いずれにしろ学生調査の継続性を重視しつつ立教大学は新たな学生生活支援、教育支援のために、そのあり方や目的を全学的に見直す時期にきていると思われる。

まつい あきこ  
(本学学生部副部長)



注1：立教大学 大学環境調査領域別  
経年変化 報告書（2001年7月）  
調査実施日 2000年10月 立教  
大学学部生・大学院生無作為抽  
出によるサンプル数 2,313名  
有効回答数 666名

注2：第11回学生生活実態調査報告  
書（2003年1月） 調査実施日  
2002年10月 立教大学学部生  
無作為抽出によるサンプル数  
2,356名 有効回答数 698名  
私大連加盟校サンプル数 11,053  
名 有効回答数 7,349名